

生活の原動力としてのアソシエーション

— バルセロナ・グラシア地区を事例として —

中 村 節 子*

An association as a foundation for living

— a case study of the Gràcia district in Barcelona —

NAKAMURA Setsuko

In Barcelona, the second largest city in Spain, there are over 200 festivals per year (Nakamura 2005a). One of them, the Gràcia Festival (La Festa Major de Gràcia) is held beginning August 15 every year for about one week. In the 25 streets which are decorated during the festival, concerts and an events are held, and many people of all ages enjoy it.

In each street, an association is organized. The association is organized according to a membership system, and works all year long. In the association on Joan blanques street, those who are in the prime of life act as leaders, but many elderly people also participate, contributing their skills and experiences.

The seniors are respected as elders, and they provide others with practical models for establishing communication, as well as relating the history.

In this paper, I will write about the environment activity within the association in Barcelona. And it is the purpose of this paper to show clearly how the association acts as the driving force of the festival activities, and how it is connected with daily life, as well as and how it enriches life for elderly people.

キーワード

アソシエーション、祭り、高齢者、生きがい

はじめに

スペイン第二の都市、バルセロナでは年間 200 以上の祭りが行なわれる（中村 2005a）。そのなかのひとつ、「グラシア祭（La Festa Major de Gràcia）」は、毎年 8 月 15 日から約 1 週間にわたり開催される。この祭りは 19 世紀後半、市の拡張によって作られたグラシア地区で生まれ、今やバルセロナの「夏の風物詩」と称されている。独創的な装飾物を施された 25 の通りでは、連日、コンサートやイベントが催され、子どもからお年寄りまでが楽しむ祭りとなっている。

*名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程

「グラシア祭」が注目されるのは、嗜好を凝らした装飾で、各通りを独自の空間へと変身させるからである。そして祭りの最終日には、最も優れた装飾を行ったとされる通りがグランプリを獲得する。つまり、通りを装飾する創り手は他の通りと競い合い、グランプリをめざす。観客は毎年、このように装飾された通りを散歩し、その中で催されるコンサートやイベントを楽しむのである。

各通りのほんとは、通りの住民を中心としたアソシアシオン（以下、アソシエーションと記す）を組織している¹。アソシエーションはソシオ（会員）制であり、祝祭日にあわせて、準備期間を設け、ほぼ年間を通して活動を行なっている。

そのひとつであるジョアン・ブランケス（Joan blanques）通りには、その通りの名前をそのままつけたジョアン・ブランケスのアソシエーションがある（以下、略してブランケスと称する）。ブランケスでは、働きざかりの男女がリーダーを勤めるが、高齢者²が複数で参加しており、彼らは能力と経験に基づいた仕事を任されている。そこでは、人生の先輩として、祭りの歴史を語り、人とのコミュニケーションをどのようにとっていくのかという実践的モデルとしての高齢者が存在する。

本稿では、まずバルセロナにおいて、このようなアソシエーション活動が活発に行われている状況を把握する。そして、活発な祭りの原動力となっているアソシエーションが、特に高齢者³にとって、いかに生活に結びつき、暮らしを充実させるものになっているかをあきらかにすることが目的である。

I. バルセロナの活発なアソシエーション活動

筆者は2002年以来、カタルーニャ州政府の伝統文化推進部門⁴の責任者であるジャン・グラウへの聞き取り調査を、毎年重ねてきた。

彼は、*FABULARI AMADES*⁵の著者であり、また同部署が発行している *QUADERNS DE CULTURA POPULAR*（カタルーニャの文化全般を紹介する冊子・全14巻 2000年発行）の執筆および編集にも携わってきた人物である。

ジャン・グラウによると、カタルーニャには5,000もの祭りがあり、次にあげる4つのタイプに区分することができる。

- ① 州の全体で祝う祭り
- ② 州のなかの県や市町村で行なわれる祭り
- ③ 地区や地域ごとに祝う祭り
- ④ ツーリストのために行なわれる祭

スペインのなかでも、特にカタルーニャ州は祭りの多い地域とされている。その理由については、カタルーニャの各県には一般的な祭り⁶があり、また〈地域ごとに行なわれる祭り〉、さらにその地域の〈通りごとに行なわれる祭り〉があるとする。

そのため祭りの数は「マイクロコスモスのように増えてくる」という。つまり、5,000という祭りの数には入りきれない小さな祭りがあることもまた示唆している。

彼はアンダルシア州の場合を例にとり、「セビリヤの春祭」のような有名な祭りがあるが、地域ごとの祭りは稀であること、さらに祭りを構成する要素の違いも指摘する。

祭りを構成する要素の違いとは、バルセロナの祭りは、アソシエーション活動が基盤となり成立している点である。アソシエーションには趣味、娯楽、スポーツ、芸能、学術、宗教政治、経済、教育、軍事などに関する無数の集団が存在するが、これらは血縁集団や地縁集団ではなく、何らかの目的が機縁となつてつくられている任意団体である。カタルーニャ州政府には、2006年1月現在で、7604団体が登録されている（表1参照）。

「スペイン国内で、カタルーニャ州と土地の面積がほぼ同じエストゥレマドゥーラ州（アンダルシアの上に位置し、人口はカタルーニャ州の600万人よりやや少ない）では、歌と踊りのグループが各34ずつあるが、カタルーニャでは、歌のグループが1000、踊りのグループが800もある」

さらに、住民の意識の違いを指摘する。

「他の都市では、人々が集まって、アイデンティティ⁷をつくろう、表明しようという意識はないが、カタルーニャではそうした人びとの欲求が強い」

アソシエーション活動への熱意は、このカタルーニャがもっとも強いと強調する。カタルーニャがアソシエーションの数が多く、活動的である理由は、中世の時代に、職業による、それぞれの組合が集団を作った歴史に由来するという。アソシエーションはフェリペ5世の時代⁸に衰退するが、以後、ふたたび盛り返えず。しかし、フランコ独裁（1939年～1975年）に入る前には、ふたたびその活動が一気に衰退したという。

隣国のフランスでもアソシエーションは、すでに15世紀から「連合」「結社」などの意味で使用

表1 バルセロナにおけるアソシエーションの種類と登録数

ジャンル	登録数
1. 楽器音楽関係	875
2. ボーカル音楽	1084
3. 祭り関係	683
4. ダンス関係	805
5. 火走りの人形 [i]	226
6. マルチな分野（一般市民への文化普及が目的）	2182
7. 専門分野 [ii]	495
8. 演劇	967
9. パフォーマンス関係	22
10. 手工芸	265
〈総計〉	7,604

i 中世動物寓話集を元に作られたドラゴンの人形、祭りの際、火を噴きながら行進する人形など

ii 映画、写真、詩、ミュージカル関係、人間の塔カタルーニャの伝統的な祭りの際に、人間が塔を作り、その形と美しさを競う）、ファルコン（チェコから輸入した、人間が積み重なる演技。「人間の塔」小より小さい）など

* 本表カタルーニャ州政府伝統文化推進局における資料と聞き取り調査により作成した（2006年1月5日現在）

されていた。アソシエーションがルソーの『社会契約論』を淵源とするような自律的な諸個人が共通の目的のために意志的に結びつくことをもとめる「協同」あるいは「協同組合」を意味するようになるのは、18世紀後半とりわけ19世紀以降のことである（有賀 2004：134）。

「市民戦争（1936～38）の際、とにかく、人びとは〈集まること〉をやめさせられた。フランコの時代は文化とアイデンティティを表現することはできなかった」とジャン・グラウは語る。

現在、カタルーニャ州政府が承認するアソシエーションを設立するための手続きは、決して複雑ではない。次の手続きを行えば、個人の資格等は問われることなく認められる。

- ① まず、集会をすること
- ② 憲章を決めて、文章にすること
- ③ 最低、「代表者」「秘書」「会計（出納帳係）」の3名を決定すること

カタルーニャ州政府では、これらのアソシエーションのすべてに対し、金銭的な支援はおこなっていないため、各アソシエーションは独立採算制である（後述するように、バルセロナ市役所が祭り関係のアソシエーションに資金援助を行っている場合もある）。アソシエーションは経済的な見返りを目的にしていないため、活動するための費用はメンバーによる出資金が基礎になっている。

Ⅱ．“家族的”なアソシエーション～ブランケス通りの場合

「グラシア祭」は、先述のジョアン・グラウによるカタルーニャの祭りの分類によると、③の「地区や地域ごとに祝う祭り」にカテゴリーされる。ジョセップ・フォルネス（バルセロナ民族学博物館・研究員）によれば、「グラシア祭」がはじまったのは、1897年からであり、当時、グラシア地区の人口はおおよそ6万人であった¹⁰。グラシア祭りを「各通りをダンスホールのように飾り、1週間、ほとんど眠ることなく、食べて踊って、夜通しすごす祭り」と解説する。

25の各通りには、住民を中心にして組織されたアソシエーションがあり、自分たちの力、つまりそれぞれの企画と方法で通りの飾りつけを完成させる。市役所は各通りに援助金を出す、祭りの運営に関与したり、人材を組織化したりすることはないという。

つまり、「グラシア祭」は行政主導型でなく、住民が組織的に祭りを盛り上げてきた祭りである。また、同地域で多く暮らす移民の人びとにとっても、自らのアイデンティティを示す祭りになっていることを指摘した。つまりアンダルシアからの移民者は、この祭りでアンダルシアの歌や踊りを披露することができ、そうすることによって、グラシア地区において文化的対話が生み出されているとしている¹¹。

この「グラシア祭」で通りを飾るアソシエーションのひとつが、ブランケスである。

ブランケスのアソシエーションが借りている事務所兼作業場は、グラシア地区のブランケス通りに面した建物の1階にある。ブランケス通りの全長は約62メートル。道沿いには銀行、本屋、木製品の工房、バイク専門店、修理専門店などの店舗が軒を連ねる。

2004年7月、「グラシア祭」を翌月に控え、準備に忙しい作業場をたずねた。屋内に入ると、彼女を含め、中高年の女性4人が、楽しそうにおしゃべりしながら、飾り物を製作中であつたが、かつ



写真1 飾り付けがすすむブランケス通りで話し合うアソシエーションの人びと



写真2 「グラシア祭」での食事会
(2004年8月19日)

ぶくのいいメルセ（68歳）が、満面の笑顔で、駆け寄ってきた。

「今日は、アエティエネストがいるわよ！」

彼女の案内で、奥の作業場に入ると、そこでは、アエティエネストこと、リカルド（55歳）が作業中であつた。彼は、生まれも育ちもブランケス通りである。結婚により、一時、他の町に住んだが、離婚の後、実家へと戻り、現在では母親（83歳）とふたり暮らしをしている。

リカルドはブランケスの代表者・グロリア（45歳）の兄であり、グロリアのほかに2人の妹がいる。彼の妹は3人もこのアソシエーションに参加し、長女はバルセロナ郊外、次女は市内のオルタ地区に住むが、時間を見つけてはここに通っている。

リカルドのすぐそばで、算数の教科書を広げながら勉強しているのは11歳のイレエ。代表者のグロリアの一人娘である。イレエに、家庭教師さながらに熱心に教えている女性（60代）もこのアソシエーションのメンバーである。

さらに奥の部屋では、ニコラス（グロリアの夫）が電気配線の修理に余念がない。彼の職業はレストランのウェイターであるが、電気関係に詳しく、毎年、「グラシア祭」でブランケス通りを装飾する際には、彼の存在は欠かせない。先述の通り、「グラシア祭」が多くの観客の関心と呼ぶのは、美しく装飾された、日常とはかけ離れた世界を体感できるからである。夜間は昼間以上に観客が増え、イルミネーションを駆使した通りの装飾を楽しむ人びとであふれかえる。

ブランケスについて、リカルドは次のように語る。

生活の原動力としてのアソシエーション

「それぞれのアソシエーションで違うけれど…このアソシエーションは、家族のようだね。こういう場所があるから、みんなで一緒に夕食をとったり、いっしょに仕事ができたりするんだ。もし、このアソシエーションがなければ、兄弟たちにも1週間も2週間も会わないだろうから。このアソシエーションのおかげで、みんなに会えるよ」

そして、家族的なアソシエーションはここだけではないらしい。

「他のアソシエーションにも友達がいるけれど、みんなそれぞれ組織形態は少しずつ違う。たとえば、友達同士でアソシエーション作っているとか。でも、活動を続けているうちに、メンバーの彼女や奥さんも参加するようになるから、結局は家族が中心になる。このように、ひとつの家族が中心になる場合が多い」

リカルドは、Tシャツやユニフォームの腕章、ワッペンを製作する会社に勤務している。

「仕事ではアーティストになれなかったけれど、ここではアーティストだよ」

彼がこのアソシエーションに入った理由は「生まれたところだから」である。

リカルドの妹のグロリアは、毎年、何をテーマにして通りを変身させるか、ブランクス通りをいかに芸術的な装飾で飾るのか、メンバーの意見をまとめる際にリーダーシップを発揮する。アーティスト肌の兄とは違い、彼女は実務面での運営を牛耳っている。つまり予算面や役所との交渉、さらに祭りの期間、この通りを警備する警察とのコミュニケーションをはかる役目もこなす。

毎年、アソシエーションの活動についての証明書（ACTA）を州政府が指定した部署に出すのも、彼女の重要な仕事であり、そうしなければ市役所や州政府から、資金を得ることができないからである。

ちなみに、ブランクスが市役所から援助される活動資金は年間で約1500ユーロ（約22万円）であるという。

「ほんとうに少しでしょ（笑）、それぞれの通りが受け取るから、しかたないけれど…」

祭りの本番では、オーケストラなどが使用する椅子、電気配線用具などは市役所から提供してもらう。しかし、オーケストラやミュージシャンへの謝礼はブランクスの財政から支払われる。

そのため、ブランクスでは祭り用の資金が必要となる。このアソシエーションにとっての大きな収入源は、祭りの期間、通りに設けたバル（BAR）での売り上げである。バルでは、ビールやジュース、水などの飲みものを販売し、またサラダ、パエリア、デザートまですべてセットになった食事券を15ユーロ（約2200円）で売り出す。会員には割引が適応される仕組みだが、一般販売価格の半分が、ブランクスの実質的な収入となる。「グロシア祭」で通りを装飾するための費用はおおよそ24000ユーロから30000ユーロ（350万～440万円）であるため、バルでの儲けは欠かせない収入源である。

ブランクスの家賃は、ひと月、600ユーロ（約9万円）かかるという。間口が約5メートル、奥行き20メートル程度。小さな台所には、大きなパエリアなべが2つぶら下がり、もちろんトイレもある。

ブランクスではSOCIO（会員）は、ひと月に、7ユーロ支払う（14歳以下は免除）。現在、会員として登録しているのは65名。そのうち13名が製作や飾り付けなどの作業を日常的に行っている。

ただし、作業は義務ではない。

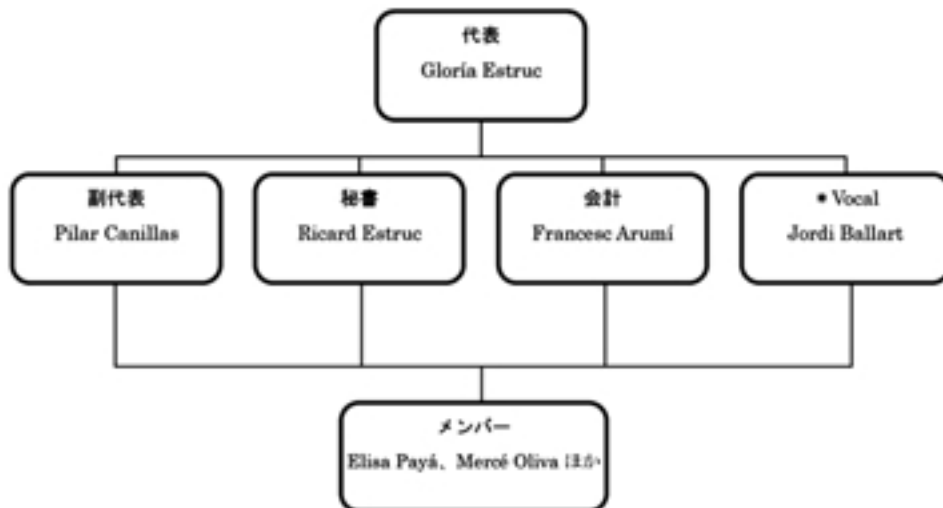
グロリアのそばで、裁縫をしていたメルセが語りかけてきた。

「このアソシエーションでの活動は、自分の生活の一部になっている。強い絆の人間関係があるし、友達もいっぱいいる。これがなければ、自分の人生は違っていた」

彼女に肩を寄せるようにして腰かけ、作業をしているマリ（66歳）には右手がない。左手だけで布をきれいに縫っている。

「私は3年前から、一人暮らししているの。両親が立て続けに亡くなってしまったので…右手は子供のころに病気をしたときに、なくしたけれど、生活は何とかやっけていけるわ。ここに来れば、寂しくないし。だって、みんながいるから」

表2 ブランケス（アソシエーション）の組織図



*「Vocal」はカタルーニャ語で「発言権のある会員」を意味する。メンバーのさまざまな意見を取りまとめる役である。副代表はあくまでも代表の補佐であり、秘書や会計などと同じ位置づけである。

Ⅲ. 「自分の居場所」と「アソシエーションのなかの仕事」

ブランケスの扉は一日中、開けっ放しであり、一年中、鍵がかけられていない。誰でもいつでも出入りできるようにするためである。「グラシア祭」にむけての作業は、6月に入ると、ほぼ毎日、午後9時ごろまで作業が続けられ、作業の後にメンバーがそろって夕食をとる日が多い。

今年の「グラシア祭」で、通りを装飾するテーマは「唄の時代」である。通りにぶら下げる34個の柱を作り、それぞれにカタルーニャ語による4種類の歌詞を、抽象絵画のように描いていく。準備はほぼ1年間ついやされた。95年以降、ブランケスでは積極的に、ペットボトルや発砲スチロールなどのリサイクル品を使っているが、今回も大半の材料がそうである。

生活の原動力としてのアソシエーション

8月8日は、通りに装飾を始める日であるため、今の時期は造形物の最終的な仕上げをしている。今年にはブランケス25周年記念でもあり、25の通りが競い合う中で、何とかグランプリをとりたいとメンバーたちは口をそろえる。

8月15日からは、ブランケス通りで「祭りを祝う会」とダンス、16日は「子供たちへの語り（寸劇）」夜には、サルサのコンサートが通りいっぱいの観客のなかで繰り広げられた。ライトアップされた夜間は特に、人の熱気とともに盛り上がる。先述のリカルド、代表者のグロリア、そしてメルセをはじめとする中高年のメンバーたちは、朝から深夜までこの通りで過ごす。彼らは幅広い年齢層の人びととしゃべり、踊り、食事をし、延々と人ごみと歓声のなかで祭りを堪能する。自宅にもどるのは明け方近くで、3～4時間の睡眠のあと、ふたたびブランケス通りにもどるという生活を1週間続けるのである。まだ11歳のイレエも大人たちと同じリズムの生活をする。

「グラシア祭は、19世紀までグラシアがまだ村だったころの心象表現のひとつなんだ。そのころの祭りは、通りで人びとが歌い、踊り、食事をとものする。何もかも忘れて、徹底的に楽しむのが祭り。そうした歴史を伝えることは、とても重要なこと。ここに生まれた者として、この祭りを大切にしながら生きてゆきたいと思うよ」と語るのは、リカルドである。彼と同じように、高齢者のメンバーたちは、若者や子どもたちに、このグラシアらしい祭りのあり方を伝えることが重要であると口をそろえる。

8月17日のコンテストは、上院議員、画家、新聞記者など6人のメンバーが、装飾された25の通りの昼と夜の様子を見てから審査が進められた。

「おかしい！ ぜったいにおかしいわ！うちの通りのほうが、絶対、きれいよね～！」

審査結果が発表された後、ブランケスをたずねた筆者に、ほほを紅潮させたマリが飛びついてきた。

筆者はこの日の午前中、マリとともにブラシア地区の主要な通りを3時間ほどかけて散歩した。彼女はこの1週間、毎朝、ほかの通りの飾りつけがどのように進んでいるのか、歩いて見てまわってきたので、それぞれの通りの装飾がどのように進んでいるかをよく把握している。私たちは今日の散歩の途中、グラシア地区の役所前広場で、無料で配られたブティファラのボカディージョ（カタルーニャの腸詰ウインナーをフランスパンではさんだサンドウィッチ）を、ともに口いっぱい頬ばりながら歩いた。そのときまでは、彼女はブランケスのグランプリを確信していたのだった。

結果は第三位。グランプリは逃したものの、「灯かり賞」「手仕事細工賞」「カタログ優秀賞」を受賞した。しかし、ブランケスのメンバーはいずれも不満のようである。筆者の周りに5人のメンバー（いずれも中高年の女性たち）がやってきた。自分たちの飾り付けが、最も芸術的で、人びとに感動を与えるものであると…。

結果がどうであれ、コンテスト日の当日も午後9時から、恒例の食事会が開かれる。通りにはテーブルと椅子が並べられ、連日、アソシエーションの人びとと来客が同席して食事をし、語り合う。華やかな食事会場となった通りで、メンバーはサラダ、トルティージャ（スペイン風オムレツ）、肉料理からデザートまで、すべて手作りした料理を、つぎつぎと来客に振舞い、もてなすのである。

先述のように「グラシア祭」が始まると、メンバーの生活はいちだんと夜型になる。メルセやテレサをはじめ、60代から70代の女性はバルで飲み物を売り、その横の出店では、カタログや写真集の販売におわれる。若者は彼女たちのリーダーシップにしたがいながら働き、人びととのやり取りや祭りの運営方法を学んでいる。下記の表3では祭り当日のスケジュールと内容を示したが、若者が高齢者からもっとも学ぶことの多いのは、食事会と、各催しを遂行する際の段取りや来客の対応である。高齢者はこうした忙しさを楽しむように動きまわり、祭りの期間、連日、夜中まで続きまわる。

表3 「グラシア祭」におけるブランクス通りのスケジュール（2004年度）

日 付	開始時間	内 容
8月15日	8:00	祭りの開始を知らせる爆竹
	18:00	祭りを祝う会
	21:00	食事会（アソシエーションのメンバー）
	23:30	コンサート「スター・トリオ」
8月16日	10:00	サン・ロック（聖人）への捧げもの（友愛の印として） ¹²
	12:00	プレゼント贈呈（通りの人や協力者へ）
	18:00	子どもたちのための語り
	21:00	食事会（関係者を招いて）
	23:30	ハバナ音楽のコンサート
8月17日	11:00	子どもたちの絵画コンクール
	18:00	グランプリの授与式（優秀な装飾をした通りに贈られる賞） ¹³
	21:30	食事会（ブランクス通りの人びとを招いて）
	23:30	サルサ音楽のコンサート
8月18日	11:00	子どもたちのための絵画アトリエ（参加費：10ユーロ）
	17:00	おとなのための絵画アトリエ（参加費：10ユーロ）受賞のお祝い
	21:00	食事会（友人を囲んで）
	23:30	ジャズコンサート
8月19日	12:00	絵画コンクール（0歳～15歳までの乳児が対象）
	17:00	おやつプレゼント
	18:00	子どもたちの劇
	21:30	食事会（友人たちを迎えて ¹⁴ ）
	23:00	音楽劇
8月20日	13:30	料理コンクール
	18:00	OVIDI MONTLLORに捧げるリサイタル
	19:30	ドキュメント映画の上映会
	21:00	食事会（通りの友人たちを招いて）
	23:30	音楽劇
8月21日	12:00	コンテストの授与式
	14:00	ソシオ会員と来客を囲んでの乾杯
	19:00	歌の時間
	19:30	若者と大人のためのダンス
	21:00	食事会（友人、会員、来客を招いて）
	23:30	大きなサルサのお祭「ハバナ・ストリート・バンド」

IV. 暮らしの中心にある祭り

ブランケスでは、グラシア祭以外にも、毎月一回、日曜日にコンサートや寸劇などの催しものをする。その際、通りは車両の通行が禁止となり、歩行者天国として人びとに開放される。このような交通規制ができるのも、市役所の協力があってこそ可能であるという。

このように、一年が、祭りや催し物のリズムでくりかえされる。

筆者は2006年1月、ほぼ毎日、このアソシエーションに通うメンバーのひとり、エリサ（83歳）に話を聞いた。彼女は、さいころ型の発泡スチロールに糸を通す作業を数人の女性たちと行っていた。

彼女の娘であるグロリアは93年から、ブランケスの代表者である。その前は、彼女の夫が25年勤めた。つまり、68年には、このアソシエーションの前身となる組織が誕生していたことになる。

「あのころ、グラシア祭も昔は近所の人たちだけの祭りだったのよ。でも、今ではバルセロナ中から若い人たちがやってくるわ」

アソシエーションを発起したばかりの時代は、フランコによる独裁政治下である。

69歳の元消防士ジョルディもエリサと同様にグラシア地区に住む。

「グラシア地区は今から100年ほど前には、ディアゴナル（バルセロナ市内の高級住宅地）に住んでいたお金持ちがバカンスに来た村。私が4～5歳のころに、市民戦争が終わって、グラシア祭が再開したんだよ。でも、フランコ時代は今よりも、ずっと少ない通りで祭りをやっていただけ。そう、確か、2～3の通りが、紙を使った飾りつけをするだけだった。フランコの時代は、検閲があったからね… それにカタラン語を使っていたのは、家族と友人との間だけだった」

現在のグラシア地区には、音楽、スポーツの団体があり、それらが祭りの際に団結するため、全体がまとまりやすいという。「グラシア祭」では、グラシアの各通りが、それぞれにアソシエーションなどの団体を結成し、通りごとに異なるプログラムで、祭りを祝う。

エリサの長男で、*ア・テ・テ・ネ*のリカルドは、バルセロナ最大の都市祭礼「メルセ祭」を引き合いに出しながら、こう断言する。

「メルセ祭は歴史的な意味はない。市役所がお金を払ってやっているだけ。グラシア祭は100年以上の歴史があるだけではなく、ほかの祭りと比べて、特異な性格。通り全体を飾りや音楽で、日常と違う世界に変えてしまうから。自分はバルセロナ人である前に、グラシア人だ。つまり、グラシア人であることが重要で、その後にバルセロナ人。バルセロナ人の後に、カタラン人。そして最後がスペイン人なんだ」

「メルセ祭」をゴシック地区のみの祭りとするリカルドであるが、実際は、市内20箇所以上を会場とし、バルセロナ全体の都市祭礼となっている。しかし、伝統的な祭りや催しものなどは旧市街に集中していることは確かである¹⁵。

「グラシア祭」は今では、バルセロナのなかでも指折りの活気ある祭りとして認識されている。しかし、グラシア地区に暮らす住民のすべてが協力的であるかということ、そうではないらしい。

「この通りには、たぶん全体の60%の人が親から、受け継いだ家に住んでいる。40%は外から

来た人。住民のすべてが祭りに参加するとは限らない。祭りの期間にはぎやかというか、かなりうるさいので、文句をいう住民もいる。だから、祭りをを行う人間は彼らから、文句を言わないように配慮しているんだ。たとえば、音楽。この通りでは、質の高い音楽をやっている。問題を起こすのは外から来る人々なんだ。アルコールをいっぱい飲み、大騒ぎするから。いずれにしても祭りは1週間だけだから、住民は協力すべきだと思う。僕たちはずいぶん努力しているのだから」¹⁶

リカルドの不満げな顔を尻目に、83歳になる母のエリサが、事務所の壁一面に貼ってある近年の「グラシア祭」の写真やポスターを見ながらつぶやいた。

「祭りこそ、私の人生よ」

表4 ブランケスのアソシエーション活動に参加している人々

名前(年齢) 性別、職業	生まれた場所	現在の住居	活動年数	アソシエーション での活動頻度	誇りにしていること
J (69) 男、退職者	新市街	グラシア 地区	10年	6月～8月15日の 期間に20～30日	カタルーニャ人であること
M (68) 女、主婦	旧市街	グラシア 地区	26年	6月以降は ほぼ毎日	人びとが誇り、そして自分 が必要なときに役に立つ人 間であること
T (66) 女、会社員	グラシア地区	グラシア 地区	28年	6月以降は ほぼ毎日	カタルーニャ人であるこ と、祭りに協力できること
A (64) 男、グラフィック デザイナー	旧市街	グラシア 地区	25年	多くの頻度で	祖母の時代から、カタルー ニャ人であること。相互協力 できる人間関係があること
B (64) 男、技術系専門職	グラシア地区	バルセロナ 郊外	はっきり しない	毎日	独立心の強い民族であるこ と。完璧に祭りの準備がで きること
C (61) 女、教員	カタルーニャ の他県	グラシア 地区	3年	年間、50～100日	ここが、世界で一番よい場 所であること
O (60) 女、主婦	旧市街	グラシア 地区	15年	年間100日以上	カタルーニャ人であること
R (55) 男、技術系専門職	グラシア地区	グラシア 地区	20年	6月～8月15日の 期間に20～30日	自分たちの個性と、グラシ ア祭の歴史を伝えられるこ とが誇り
S (51) 女、公務員	グラシア地区	グラシア 地区	20年	6月～8月15日の 期間に20～30日	誇り高き文化
E (49) 女、調理師	グラシア地区	グラシア 地区	24年	—	グラシア人であること
F (49) 女、会社員	旧市街	グラシア 地区	15年	6月～8月15日の 期間に20～30日	—
G (45) 女、会社員	グラシア地区	グラシア 地区	17年	年間、300日	独自の言語と文化を持って いること
H (35) 男、会社員	グラシア地区	グラシア 地区	9年	年間、60日	サルダナ(カタルーニャの 民族ダンス)。グラシア祭 での食事会(野外)

*本表のアンケートは、ブランケスの会員(65名)のなかで、ほぼ日常的に活動を行っている人びとに行った(2003～2005年)。ブランケスは創立25年であるが、アソシエーション組織になる前から、活動を行っている人もいる。

表 5 アソシエーション参加者の男女比率
(表 4 における 13 人)

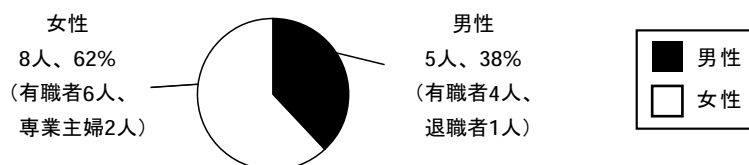
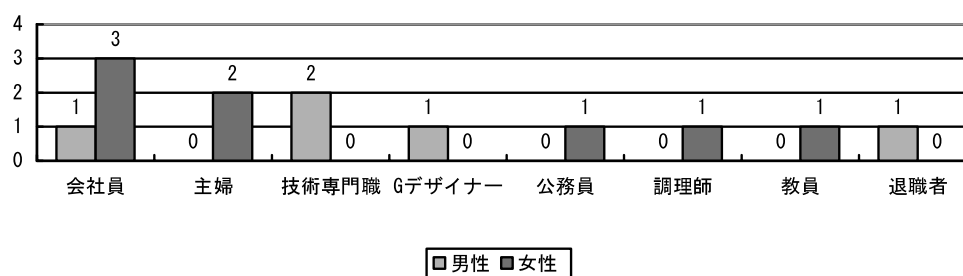


表 6 ブランケスのメンバーの職業



*本表は表 4 のアンケートをもとに職業別にグラフ化したものである。

V. 考察～祭りとアソシエーションのかかわりのなかで、生きるということ

「グラシア祭」は 8 月 16 日から約一週間、ジョセップ・フォルネスがいうように、「通りがダンスホールへと変身する」祭りである。

「仕事ではアーティストになれなかったけれど、ここではアーティストだよ」と、リカルドが語ったように、彼らは芸術的感性を、通りの装飾で発揮する。松平誠は、祝祭とは「日常生活の反転、そこからの脱却と変身によって、日常的な現実を客観化、対象化し、それによって、感性の世界を復活させ、社会的共感を生み出す共同行為」(1990: 2) としたが、リカルドはアソシエーションのなかで、アーティストとして認知され、その感性が祭りで評価されることに、誇りとやりがいを感じている。

また、普通の主婦であるメルセは、ブランケスのアソシエーションが出店するバルや店を仕切ることで、彼女の存在を公に示すことになる。つまり、「グラシア祭」の期間、このような美しく独創的な装飾を実現したアーティスト集団の一員となるのである。定年退職したジョルディや、一人暮らしをするマリも同様である。

祭りの期間、彼らは一晩中、歌やダンスを楽しみ、BAR を開き、来客の対応におわれる。メンバーは、祭りのプログラムとは、別の意味で主役である。彼らは 1 年間かけて自分たちのアソシエーションが作り上げた通りの装飾とともに、それらを「創造した人びと」として、多くの人びとの視線と関心を集め、社会的に認められる。



写真3 83歳のエリサの自慢は、ブランケスが獲得した数々のトロフィー



写真4 2004年度のグランプリを獲得したベルデ通りの装飾

都市は、人びとをも、見世物として存在させる。ひとは盛り場に何か見ものを求めて集まるが、同時に自分自身が見せ物になるのである（川北 64：36）。「見世物」となった人びとにとって、そこに多くの観客がいることは、大きな魅力となる。

「グラシア祭」の期間中、夜の通りは屋外の食事会場にもなるが、テーブルの中心に座るのは、エリサをはじめとする高齢者である。高齢者たちはこの食事会を晴れ晴れとした表情で来客を迎え、語り合い、その後の歌や踊りをともに楽しむ。主婦の経験が長い彼女たちにとって、日ごろの活動日に限らず、祭りの際に得意の料理をふるまうことは、人生の先輩として、一目おかれることにつながる。

彼らの日常には、祝祭の準備のための作業が組み込まれ、体の不自由な高齢者も自分でできる仕事、例えば、装飾用の部品作りや、留守番役などを進んで行う。祝祭当日は不眠不休で来客の対応や、祭りの運営におわれる。表4および表5で示したように、ほぼ日常的に活動を行っている13人のうち、男性は5名、女性は8名、そのうち退職者の男性1名と専業主婦の女性2名以外は有職者である。年齢別では、60代が13人中6人ともっとも多い。

これだけ高い頻度でアソシエーションと関わるには、当然、自由な時間が必要となる。そうした時間が確保できる根底には、スペイン人が仕事を終えた後は、友人や気の合う仲間たちとの時間を大切にする生活がある（中村 2007）。彼らは、仕事を離れたアソシエーション活動をそうした時間の使い方ができる場としていることがうかがえ、同時に生きがいと活力の源にもなっていることが、リカルドやマリ、エリサなどの発言からも読み取れる。

生活の原動力としてのアソシエーション

これまで老人の問題は、哲学や倫理学の研究対象となる場合が多く、心理学は不安や抑うつ、ストレスといったネガティブな情緒に主力がおかれてきたが¹⁷、心理学者の廣田君美は老人の生きがいについて、次のように分析する。

①心に張りのあるという充実感、②生活に適度な変化があって単調でないこと、③社会や他人から必要とされている有能感、④自分が他者から認められているという承認欲求、⑤自分の人間的成長や自己実現を図ろうとする意欲、⑥積極的に物事に対処しようとする主体性などの諸条件による(1995: 215)。

こうした廣田による分析は、ブランケスの人びとの発言と活動状況からも実証できるものである。つまり、ブランケスの人びとは、

- I. 生計を立てるため以外の仕事と、祭りを軸にすえた私生活のリズムがある(上記②に関連)。
- II. 祭りの本番では、タイトル獲得という目的を達成するまでの緊張感と高揚感があり、他の通りの人びとや来客者からの発言から受ける刺激がある(上記①ならびに②に関連)。
- III. 通りを装飾するという仕事で、彼らは必要な人材とみなされる(上記③および④に関連)。
- IV. その活動の結果として、入賞することで多く人びとからの賞賛が得られる(上記④に関連)。
- V. 祭りが終わっても、さらなる賞賛を得たい気持ちがやる気と競争心を起こさせ、活動にも積極性がでてくるという流れができるのである(上記⑤ならびに⑥に関連)。

祭りとは自分自身を日常とは違った状況に置くという説もあるが、表4に見られるように、彼らの生活のなかには、かなりの頻度で祭りに関わる時間があり、アソシエーション活動が、日常生活に入り込んでいるといえる。

そして、リカルドが自分自身を「スペイン人」よりも「カタルーニャ人」、そして究極の意味で「グラシア人」と断言した気持ちのなかには、この地区への愛着と、行政主導型の「メルセ祭」への対抗意識が示されている。「メルセ祭」はバルセロナ市役所が主催する行政主体の都市祭礼であるのに対し、「グラシア祭」はここに暮らす人びとが、自分たちの力で立ち上げ、続けている祭りである。

アソシエーション研究を行ってきた社会学者の佐藤慶幸は「現代の問題は、政府や企業の権力が強まり、社会全般のシステムの合理化がすすむなかで、いかにして人間の自由の発現の場を確保するかを問うこととである」(94: 123)としているが、リカルドは〈自分らしい自由な発現の場〉を獲得するという意味でも、祭りを創造するアソシエーションの活動を行っている。つまり、高度に複雑化、分業化した都市社会のなかで、自分らしい生き抜くための場を獲得する方法として祭りのアソシエーションを選択しているのである。

おわりに

ブランケスは、夫を亡くした老婦人、未婚のまま高齢者となった女性、また定年退職した男性などが参加し、彼らは子どもから高齢者まで幅広い年齢層で構成されているアソシエーションであり、家族同様のつきあいが行われている。

S・マルガリータによれば、スペイン人の家庭は、生においても情緒面においても豊かであり、フランスの家庭の特徴である形式的な伝統にも、厳格な組織化にもとづいていない。そして芸術は、民衆的生のもっとも強力な現われのひとつであり、フランスやイギリスに比べ、美的態度が自然で自発的であり、生得的でしかも一般的な唯一の国であるという（85：186－273）。ここには、スペインにおける、ゆるやかでありながら、豊かで強い絆で結ばれた家族関係、さらに彼らが体得している美的感覚が示されている。

“家族的”な集団であるブランケスは、祭りの準備、本番での役割も含め、役割を厳格に分担しない。すべてやれる人がやり、やれなければ誰かがそれを補うといった柔軟な紐帯によってなりたっている。しかも、生活の中心である食事は、活動の延長線として欠かせない。それは祭りの本番においても、通りに椅子とテーブルを出し、屋外の食事会場を作りあげることからもわかる。

しかし、ブランケスのアソシエーションはリカルドの一家が中心になっているものの、家族や親類への強制力はない。またブランケス通りに居住する人びとが、アソシエーションに参加するか否かについても、基本的に個人の自由な意志によって決定される。

そして、美的感覚を発揮する芸術作品でいかに通りを飾るかが、彼らが掲げ続けるテーマであるが、仕事の進み具合、問題や関心に応じて、人びとは相談しあう。リカルドがグラシアの人びとに「グラシア祭」の歴史を語ったように、ブランケスの高齢者は若い人びとに祝祭の歴史を伝えている。そして、これまで培った主婦としての能力や、職業や趣味を通して体得した技術的な技能を、祭りの現場で発揮しながら、コミュニティづくりの基礎となる人間関係を深めている。

以上のように、本研究では2002年から2006年にかけて蓄積してきた調査をもとに、祝祭に関わる人々の意識と周辺環境から、アソシエーションへの参加が、人びとの生活に深く結びつき、暮らしに活力をもたらしていることを分析してきたが、論点をまとめると次のようになる。

- ① バルセロナには文化・芸術に関わる多くのアソシエーションが存在する。
- ② 「グラシア祭」を構成するアソシエーションのひとつ、ブランケスでは、高齢者の人たちが活発に活動を行っている。
- ③ ブランケスの高齢者の人びとの発言から、アソシエーション活動の場は、彼らにとって生活のなかでの拠り所となり、また生きがいへとつながる経験が、活動を通して積み重ねられている。
- ④ ブランケスは「グラシア祭」で、自分たちが装飾した通りがグランプリを獲得することを目指しているが、それは、個人の能力を、生計を立てる仕事以外で実現することにつながっている。
- ⑤ ブランケスのアソシエーションは、個人の自由な意志で選択した場であり、地域や親族関係にもとづく強制力によって参加している場ではない。また個人では実現できない社会への働きかけを可能にする場であり、高齢者も子どもも平等の立場に関わりあう。

本稿の事例は、バルセロナのグラシア地区という、しかも小さな通りのアソシエーションでの活動分析ではあるが、活力ある都市の様相になかに、個人の自由意志に基づくアソシエーションとし

での組織形態があり、そこには高齢者の自発的な活動が含まれていることをあきらかにすることができた。今後は、アソシエーションをキーワードに「個人」と「社会」の問題について、日本との比較も含めて、論点を深めていきたい。

謝辞

2005年から2006年にかけてのスペインにおける現地調査は、グラシアン基金ならびにユニバーサル財団の研究助成金によって実施することができました。この場をおかりして、深くお礼申し上げます。

注

¹ R.M. マッキーヴァーの古典的定義によれば、アソシエーションは一定地域における共同生活領域をさす「コミュニティ」の部分領域として、特定の関係集団をこう呼び、「何らかの共通の目的・関心を充たすために心によって機能的に組織されたものである。アメリカを中心にクラブの社会人類学を探求してきた綾部恒雄は、アソシエーションをボランティア・アソシエーションと同義語として、「一定の約束の下に、基本的には平等な資格で、自発的に加入した成員によって運営される、生計を目的としない、パートタイム的の私的な集団」(1988: 6-233)とし、田畑稔はアソシエーションは本来、「仲間になること」を意味し、派生的に「仲間になった状態」を表す(2003: 23)としているが、本稿でも、これらと同様の意味で使用する。

² スペイン女性の平均寿命はEU諸国中、第一位で83歳、男性は第四位で76.3歳である(2006年4月19日付、現地新聞「EL PERIODICO」)。長寿の要因は、医療システムの充実と、オリーブオイル、赤ワインなど、心臓病によいとされる地中海料理が好まれているためとする見解が有力。スペインに次ぐ長寿国はイタリア、フランス。またスペインでは80歳以上の人口が100万人で、10年前の2倍、その約半数が介護が必要な状況にいる。一人暮らしの高齢者(65歳以上)は150万人(2006年10月2日付 BS ワールドニュース)。

³ スペインの総人口(約4200万)における65歳以上の人口は720万人(2004年)。これは人口の17%近くに達し、16歳未満の人口をすでに上回っている。一方、2003年の合計特殊出生率(女性が一生に産む平均子供数)は1.30人と急速に少子高齢化が進んでいる(独立行政法人 労働政策研究・研修機構 2005年5月号「スペイン」を参照した)

⁴ Generalitat de Catalunya・Departament de Cultura Centre de Promoció de la Cultura Popular i Tradicional Catalana

⁵ カタルーニャの神話や歴史学の第一人者といわれるジョアン・アマデスの研究書。

⁶ 大多数がカトリックを信仰するスペインでは、その祭りの多くはキリスト教に由来する祝祭暦に基づいているが、祭りの多くは古代の土着信仰や農業のリズムによる祝祭がキリスト教伝播とともに変化したものである。太陽を信仰する古代宗教の冬至の祭りをキリスト降誕の祝祭に置き換えたのがクリスマスであり、春分の祭りをキリストの復活祭として定着させたのが聖週間であるとされている(成田2002: 203)

⁷ アイデンティティに関しては、これまでさまざまな議論が重ねられ、近年では「従来、アイデンティティは個人の属性であるかのように論じられてきたが、異文化接触下の人々の意識や行動をみるかぎり、アイデンティティは、個人の自己価値の存在証明を求める欲求と環境との相互作用のプロセスから創出されるとみたほうがよい」(箕浦 2001)とする見解もある。しかし、本稿では、自己の属性、身元や素性といった意味で発言者が使用しているものとして解釈する。

- ⁸ フェリペ5世 (Felipe V、1683年12月19日-1746年7月9日)、スペイン・ボルボーン (ブルボン) 朝最初の国王でフランス国王ルイ14世とスペイン・アブスブルゴ (ハプスブルク) 家マリー・テレーズの孫。在位は1700年-1724年、1724年-1746年。
- ⁹ ジャン・グラウによれば、アソシエーションのなかでも、一般的には、巨人人形グループと「人間の塔」のグループに入っている人びとは会費を払わない場合がほとんどである。
- ¹⁰ バルセロナの都市としての骨格は1860年以後の19世紀後半に成立した。中世の佇まいを残すゴシック地区を中心都市した旧バルセロナと、バルセロナ平原の旧グラシアなどの町々を併合する新しい都市のビジョンが描かれたI・ゼルダによる都市計画案がもとになっている。これによって、中世以来の城壁が撤去され、50メートル幅の幹線道路と20メートル幅の道路が縦横に交差した、一区画133メートル四方のグリッド状をなす拡張地区が形成された (入江正行 1998:145)
- ¹¹ 筆者は2003年および2004年、8月15日から23日にかけて、各通りで開催されたコンサートや演劇を中心に、サルダナなどのダンス、「人間の城」などがプログラミングされた「グラシア祭」の参与観察を行なった。初日(15日)の午前10時からはグラシア地区の教会でミサが行なわれたが、このことはどの通りのプログラムには記載されていない。その理由については、現代の若者は祭り自体に関心があっても、ミサにはほとんど興味をしめさないため、数年前からプログラムには掲載しなくなったという。同内容はジョセップ・フォルネスの論文 *Hablar de fiesta en Barcelona* にも記載されている。
- ¹² 8月16日がサン・ロック聖人の日にあたるため、バルセロナの旧市街では1589年より400年以上続いている「サン・ロック祭」がこの日を前後して数日間行われている。
- ¹³ この授与式はブランケス通りではなく、区役所前の広場で行われる。
- ¹⁴ この日の来客は、「グラシア祭」の警備にあたる警察関係者が中心に招かれた。
- ¹⁵ 拙稿2005a「バルセロナの都市祭礼『メルセ祭』と祭祀集団の役割についての分析」ならびに2006a「拡大する都市祭礼の様相について～バルセロナの『メルセ祭』を事例として」を参照していただきたい。
- ¹⁶ 2004年、「グラシア祭」の期間中に、大騒ぎした若者たちが警察官ともみあい、暴力事件に発展したため、以後、祭りは深夜2時までにおえるとする規制が設けられた。
- ¹⁷ 幸福の根源を探求したイギリスの社会心理学者マイケル・アーガイルは、人間の幸福とは、その人を取り巻く社会的関係のあり方に基づくものとする。幸福とは何か、何によってもたらされるのかを対人関係、仕事、余暇の3つの因子に対して、それぞれの満足度から考察と分析をしている。

参 考 文 献

- 有賀郁敏 2004「アソシエーションの歴史と現代の公共圏」佐藤嘉一編『方法としての人間と文化』、ミネルヴァ書房
- 川北 稔 1964「見せ物としての都市」樺山紘一・奥田道大編『都市の文化』、有斐閣
- 佐々木孝訳 ウナムーノ著作集 1972、『スペインの本質』、法政大学出版局
- 佐藤慶幸 1994『アソシエーションの社会学～行為論の展開』、早稲田大学出版部
- 入江正行 1998「カタロニアの大地とアントニ・ガウディ」壽里順平・原輝史編『スペインの社会』、早稲田大学出版部
- 田端稔ほか編 2003『アソシエーション革命へ【理論・構想・実践】』、社会評論社
- 中村節子 2005a「バルセロナの都市祭礼『メルセ祭』と祭祀集団の役割についての分析」『生活学会論叢 Vol.10』、日本生活学会
- 2005b「バルセロナにおける二重言語と市民生活」『ヨーロッパ基層文化研究 No.1』ヨーロッパ基層文化研究会
- 2006a「拡大する都市祭礼の様相について～バルセロナの『メルセ祭』を事例として」『名古屋大学人文科学研究 第35号』、名古屋大学大学院文学研究科

生活の原動力としてのアソシエーション

- 2007 刊行予定「BAR (バル) をめぐる人びと～バルセロナの「HAITÍ」を事例として」
『名古屋大学人文科学研究 第36号』、名古屋大学大学院文学研究科
- 廣田君美 1995『生きがいの創造と人間関係』、関西大学出版部
- マイケル・アーガイル著 石田梅男訳 1994『幸福の心理学』、誠信書房
- 松平 誠 1990『祝祭都市の社会学』、有斐閣
- 箕浦康子 2001「多文化教育とアイデンティティ」柴野昌山編『文化伝達の社会学』、世界思想社
- R.M. マッキーヴァー 中久郎ほか監訳 1975『コミュニティ』、ミネルヴァ書房
- Francesc Rillo I Vicens Sancllemente, 1995 *Petita història de la Festa Major de Gràcia*, FDERACIÓ DE CARRERS FESTA MAJOR GRÀCIA